

《論文》

女の視線がつくる男性像

——ロサリオ・カステリャノス作品とマチスモ言説

The Male Image Created by Women:
Rosario Castellanos' *Balún Canán* and the Discourse of “Machismo”

洲崎 圭子 SUSAKI Keiko

In this paper, I examine the discourse of “machismo” and the term “macho” in Latin America, particularly in Mexico. I discuss how these concepts became established, with reference to the novel *Balún Canán* by the female writer Rosario Castellanos, which features male characters that were considered typically macho in Mexico's early modern period.

1. はじめに

「男らしい」、「女らしい」という表現は、現代日本においても日常的に使用される。うっかりしていると「それでも男か」や、「そんなことは男らしくない」といったように揶揄されることもあると井川ちとせは言う。どうやら「男という地位は、自動的に授けられるものではなく勝ち取るべきもの」¹であり、いつ剥奪されるかわからないため繰り返し獲得を試みなければならない不安定なものであるらしいと説く。

「雄の」という意味を持つスペイン語のマチヨ *macho* という単語には通常、「男らしい」と日本語訳が当てられる。また、マチヨな男性が自らの権力を誇示するやり方であるとされるマチスモ *machismo* は、男性優位主義と訳される。これらの単語は、メキシコをはじめとするラテンアメリカ諸国において、男性が女性に隷属を強いるやり方を正当化するため、現代社会においても日常的な場面で頻繁に用いられるのは周知のことであり、従来からステレオタイプで語られることが多い。マチヨやマチスモという考え方は、植民地

期以前から存在するかのように広く喧伝されてきたが、実はそうではないということは近年の研究で明らかになってきている。アメリカ・パレーデスによると、19世紀に多く詠まれたコリード²においては、今日使用されているような意味でのマチョあるいはマチスモという用語は見当たらず、むしろ革命期以降、第二次世界大戦を経たあとの1940年代になってからポピュラリティを獲得していった³とされている。

ところで、ラテンアメリカにおいては、娘の将来の決定権は家父長である父親が握っていると言われる。「当家」にとって一番ふさわしい結婚相手を決めるためである。学校は男女別々であり、女性は結婚するまで父親の管理監督下に置かれるため、女性作家たちにとって男性とは、父親・兄弟・いとこ・おじやその友人たちである。それゆえ、彼女たちの小説世界で取り上げられる主人公もまた、身近に存在する人々であるといった傾向もある。そして、たとえ結婚したとしても管理監督権は継続され、単に『所有者』の変更⁴でしかあり得ない。娘時代は父の、結婚してのちは夫の、傍若無人とも言える抑圧にひたすら耐え忍ぶといったパターンがそれである。こういったジェンダー規範に支えられた家父長的家族制度は、新大陸において血族の結束を高め、大土地所有制度下の財産保持をはかるため必要不可欠なものであったのである。

四世紀以上も続いてきたメキシコの大土地所有制度が完全に解体されたのは1940年代になってからであり、当時の辺境の地チアパスを舞台にし、先住民生活や崩壊していく大農園の様子を描いたのがロサリオ・カステリャノス（1925-1974）であった。彼女の第一小説『バルン・カナン』⁵（1958）においては、マチョの典型とされてきた農園主が登場する。第一部と第三部の語り手は7歳の女兒である。大土地所有制度の崩壊の岐路にたつ農園主一族と農園社会のありようが女兒によって語られる同小説では、家族や大勢の使用人たちに対し強大な権力を誇示しようとする農園主のふるまい、父や夫のあり方、あるべき姿が描写される。パレーデスの指摘どおり、1940年代を境に「マチョ」が使用されはじめたとするならば、それ以前の時代、農園主はマチョではなかったのかという疑問がわく。また、マチョという単語は、そ

もそもいったい誰によってどのように使われ始めたのだろうか。

本稿ではまず、メキシコをはじめとするラテンアメリカの国々における男女の役割意識についての特徴を確認し、次に、マチョやマチスモ言説といったものが、メキシコでどのように定義されてきたかを歴史的に整理する。その上で、メキシコ人女性作家ロサリオ・カステリャノスの『バルン・カナン』から、典型的マチョと見なされていた農園主のふるまい方を分析する。その際、女性からのまなざしに着目することで、マチスモ言説とは、男女のジェンダー規範に裏打ちされたものであるということについて検証する。男はこうあるべきであると期待する女の側からの見方に焦点化することで、マチスモ言説がいかに成立しえたかということについて考察する。

2. ラテンアメリカ特有の男女の役割意識

米国の文化人類学者チャールズ・ワーグレイは1953年に、一般的にラテンアメリカにおいて共通してみられる人々の行動パターンのうち驚くべきものは「男性と女性にきだめられている役割である。すくなくとも理論的にラテン・アメリカは男性が支配する社会である」⁶と、自国の外務省職員研修において語っている。性による扱いの差異は幼児のころから、米国におけるそれよりもっとはっきりとしており、彼らは息子がマチョの兆しを見せてくれることを望み、娘には女らしくあることを願うとする。そして女性たちとはいうと、自らが実業家、専門職に従事することにはかなりの抵抗があるとみなされていた。

このように、男性が女性を支配しかつ隷属と忍従を強いてきたことは、決してラテンアメリカ社会に特有のものではない。にもかかわらずラテンアメリカにおいては、旧宗主国スペインの伝統とアラブの影響を基に、根強い男性優位主義の文化がさまざまな面で表出していると言われる。女性は生れ出た瞬間から、家族のなかでの立ち位置が厳密に定められる。弱々しく、脆く無防備な存在がすなわち女性であり、防護されかつ危険から隔てられ、とりわけ男性陣から隔離される。純潔で服従的、従順で、決まった一人とのみ性

的關係を持つといった厳しい規範を早い時期から教え込まれる。妻は絶対の貞節が当然とされるが、夫が不義を働くのは通例である。男性にとっては、米国で離婚することのほうが、ラテンアメリカで不貞が掛けに知れ渡るよりも「はるかに不利」である⁷と言われる。つまり女性にとっては、結婚という「法的なことが唯一、重要」⁸なのである。女性は、妻となり母となつてはじめて一人前と見なされるということでもある。

スペイン統治が開始されて以来、ラテンアメリカはカトリックの新しい布教の舞台であった。教会は確立された制度のひとつとして、今日に至るまで人々の生活に多大な影響を与えてきている。植民地時代にあつては、大土地所有制度や家父長的家族制度とともに、カトリック教会の強固な支配が統治手段のひとつとしてその大きな役割を担っていたからである。そしてその伝統は現代まで確実に受け継がれているといえよう。

そうしたカトリック文化をベースに女性を理想化する考え方として、マリアニスモと称されるものがある。マリアニスモとは、カトリック信者の聖母マリアへの信仰に由来する概念である。女性崇拜、母親崇拜の伝統に基づくものであり、理想化された母性に基づき男性に対して女性の精神的優位主義を表す概念とされていることについてはすでに拙論で言及したとおりである⁹。とりわけ「グアダルーペの聖母」はメキシコの混血文化の象徴であると言われており、結婚した女性はこの聖母像を手本として、妻となり母となることが期待される¹⁰。グアダルーペの聖母とは、スペインによるメキシコ征服直後にメキシコ市郊外に出現したと言われていた黒髪、褐色の肌の聖母像のことであり、先住民を中心にメキシコ人の精神的支柱のひとつと称される。それは、征服されて文化的・宗教的な孤児となったメキシコ人を慰め、あらゆるものを受け入れる受容性という理念として、母性を理想化した存在でもある。

そのマリアニスモと表裏一体の考え方が、マチスモであるとされてきた。それは、男性のふるまい方の根幹を支えるものとして、両性間の役割分担を前提とした社会秩序を維持し正当化してきた。マチスモの伝統によると、勇敢で暴力的、名誉を何よりも重んじ、性的に放縦で、女性に大勢の子どもを

産ませる男性が理想とされた。マチスモは、男らしさ、男性の権化、勇気の意味と同等に扱われ、支配・権力の象徴とみなされなかつ、新大陸における征服や大土地所有制度による支配の補償として、メキシコ人男性に現れた自己主張であると分析されてきた。しかしながらこの言葉に代表されるマチョな男性イメージは、実はフロイト理論がメキシコへ導入されて以降の最近のことであり、幾世紀にもわたって人々を縛ってきた考え方ではなかった¹¹と林和宏は指摘する。また、現在流通しているマチスモという言葉には、家族を守る強さといった尊厳が感じられず、アングロ系アメリカ人が米国内のチカーノ（メキシコ系アメリカ人）を周縁化するために「発明」した単語であるとグローリア・アンサルドゥーアは断言¹²しているのである。

見方を変えたとラテンアメリカ社会とは、マチスモ言説が支配する男性優位主義社会であるとはいえ、マリアニスモといった考え方に「守護」された女性が、他の西欧諸国よりもはるかに有利な社会条件を享受しうることも可能であったのである。したがって男女平等を主張するフェミニズム運動は、ラテンアメリカ社会では一般的に受け入れられにくく、ましてやアメリカ合衆国において見られたような急進的な運動に対しては、何らの共感さえも呼び起こさないと1960年代までは信じられていたほどである¹³。

1970年代以降、ラテンアメリカ社会においては人口増加率の低下、教育の普及、労働市場への女性の進出など、変化はめざましい。また、国会議員、政府官僚などの主要ポストに就くなど、政治の意思決定に参加する女性の割合は、日本などよりはるかに高い。とはいえ、国や人種、階級や都市／農村といった異なる社会制度下にあっても、総じてラテンアメリカ諸国に共通してみられるこれら男性観・女性観が、同地域の男性／女性のあり方を規定してきた。人々は、家父長制社会が構築した制限域つまりジェンダー規範に閉じ込められ、男性の覇権によって強固になった社会慣習すなわちマチスモ／マリアニスモとして知られるものによって束縛され続けている¹⁴と言えるのである。

以上、ここまではラテンアメリカ特有のマチスモとマリアニスモの関係性を概観した。次節では、マチョやマチスモが、メキシコにおいてどのように

語られきたかについての研究状況を考察する。

3. マチヨの正体

マチヨの由来や使われ方の検討は、前節で引用した2004年の林和宏の論考によるところが大きい。現代メキシコ社会において広く喧伝されているマチスモ言説というものは、パレーデスと同じく、そもそもメキシコ革命期以前には確認されなかったものでありかつそれほど長い伝統があるものではないと林は指摘する。「人文・社会科学を問わずマチスモは長らくそれ自体の内実がとわれることのない説明項として機能してきた感が強い」¹⁵としたその論考では、同言説が、メキシコ人論と関連づけられた結果、ステレオタイプ化されたマチヨの内実が、後期資本主義時代における新たな家父長的アイデンティティ危機と相まって国家創造の契機に出現していることが明らかにされる。その上で、「マチスモにまつわる語りは容易な一般化を拒む多様性を孕むものである」¹⁶として、現代メキシコ社会においてなお、固有の自我意識として不断に交渉され続けていることが結論として示されるのである。

マチスモを定義する際、林は、国民国家論の端緒であるとされているサムエル・ラモスの『メキシコ人とは何か』(1934)とともに、1990年にノーベル賞を受賞した詩人オクタビオ・パスの『孤独の迷宮』(1950)の2冊を取り上げた。パスが同書の冒頭、ラモスのメキシコ人論に言及していることもあり、これら2冊については金字塔のごとく、メキシコで文学作品を分析する際、引用参照される機会が多い¹⁷。20世紀初頭、メキシコ革命を経て国民国家創成に向かって邁進した時期、今後の国家のあり方や国民の目指すべき方向性が広く検討され、社会状況とともに自国民の現状分析の姿勢がまず問われることは当然であると言えた。パスはまず、「マチヨ」とは、信用しているものを守ることも見張ることもでき、「男らしさは敵の武器、あるいは外界の衝撃に対して、どのくらい不死身であるかによって計られる」¹⁸と論じ始めている。そして、スペインによる植民地支配下、被征服者としての惨状を受け入れるしかなかった際、先住民男性側の反動としての過剰な男性性

の発露がマチョであることにつながるものであり、征服されたことに起因するメキシコ人の劣等感と深く関連していると断言する。林はそのパスの分析とともに、メキシコ国民文化論の元祖ともなったラモスの論にも言及する。ラモスは、すべてを所有するヨーロッパ人と違って自分たちメキシコ人には何もないが、「しかし……我々はとても男性的なのだ」¹⁹として、「男らしさ（マチョ）²⁰という価値を用いて自分の空虚さを満たそうとする」²¹傾向があることを取りあげた。パスの論考と同様に、自らの男性性が「被植民者男性の抗議の形」²²を取り、そのことがマチョであることに転用されたということである。いずれにせよ、メキシコのナショナルアイデンティティ形成とマチスモが接続して語られ、その説明が階級・地域性・エスニシティに帰せられてしまう危険性をも林は指摘した。

さらに林は、メキシコ人自身が自国民について論じた上記2冊の他、メキシコについて人類学的見地からアプローチした米国人研究者オスカー・ルイスの『サンチェスの子供たち』（1961）にも言及した。ルイスは同書において、たとえ相手に殺されても降参せず、微笑みを浮かべて死ぬ努力をするものを男らしい（マチョ）²³と呼ぶとして、メキシコにおける男性性を定義した。ルイスの民族学的記述は、「その後にわたってメキシコ文化や国民性に言及するに際して盛んに引用され、その現象を可視的なものとして提示することに貢献した」²⁴と林が評するとおり、ラモスやパスの論考とともに、メキシコの文学作品を分析する際にもさまざまに引用される。

その後、米国のマシュー・ガットマンは『マチョの意味』（1996）において、マチスモ言説の分析につき人類学的立場から取り組んだ。出版以来、さまざまな研究者によって参照される機会が多い同書でガットマンは、メキシコシティの労働者階級の男性を対象にフィールド調査を実施し、彼らの生活文化・様式、価値観、生きざまについて多くのインタビューを行った結果をもとに、彼らのあいだで喧伝されるマチスモ言説のありようを取り出してみせた。同書の表紙の写真が、赤ん坊を腕に抱く口髭のメキシコ人男性であることからわかるように、マチョなメキシコ人男性が「有害な」²⁵存在であるとして多くの人類学者たちがつくりあげてきたイメージは、現実社

会の状況とはまったく乖離していると結論づける。大酒飲みで暴力をふるうことが男らしいとしてきたことは実際のメキシコ人のありようとはかけ離れており、実はそういったイメージは、「大多数のメキシコ人男性の人生における父親としての活動をおおかたに無視してきたものである」²⁶と断言し、彼らが家事・育児への多大な貢献をしていることを見逃したものであることを改めて指摘したのである。

ガットマンのこの論考には、都会で働くメキシコ人男性たちがマチスモについて会話した内容が、そのままに書き起こしされている。両親と同居して二人の子供を養育している知人の独身男性の話に及んだ際、その彼のことを指して「間抜けなやつさ。二人もチビをつくってしまつて。メキシコのマチョ (macho mexicano) だよ」²⁷と発言したことに対し、ガットマンがマチョの意味を改めて尋ねたところ、「メキシコのマチョのイデオロギーは、偏狭さ。後で何が起こるか深く考えもせず、目の前の満足や享楽や欲望のことしか見てなかったのだ。でも今では少なくなつてきている」と解説が付されたことが報告されている。間髪を容れずに、インタビュアーである著者が、それでは君たちはマチョではないのかと尋ねたところ、「いいや、おれたちはニンゲンさ」²⁸と回答があったとある。このやりとりからは、子供をつくることで男性性を誇示しようとしたやり方を、macho mexicano と称してひとくくりにし、非難するためにマチョという単語を使用しているかのように見受けられる。つまり、短絡的にしか行動できなかった「間抜け」な子持ちの独身男性を揶揄しているのである。男性たちの間で、必ずしもマチョが手放しで歓迎、礼賛されるものではないことが判明する。彼らの現実生活を丹念に検証したガットマンの調査結果からは、一般に流布されているマチスモ言説と内実が違い、マチョの定義やマチョであるべしとした過度の期待は、単なる都市伝説的なものに過ぎないということが導きだされる。

こうしたガットマンを取り上げ、メキシコにあつては「ジェンダー・アイデンティティや慣習の変化は90年代半ば頃の特徴である」²⁹と述べた林の論考には、マチョについて歴史的社会的分野から切り込んだロバート・マッキー・アーウィンの『メキシコの男らしさ』(2003)への言及はない。マ

チョというものは「定義は簡単ではないものの、誰もが男らしさとはどういうことかは知っている。だからこそ定義の必要がない」³⁰と裁定したアーウィン、小説など複数の文学作品を取り上げて、作品中の男性人物たちのマチョぶりを分析する。ラテンアメリカ初の小説作品であるとされている1816年出版の『疥癬にかかったおうむ』³¹以降、バルバチャーノ・ポンセが男性同性愛者をメインテーマとした小説をメキシコで出版する1964年までの時代、男らしさの描かれ方の変遷が提示される³²。ガットマンを引用しつつアーウィンは、メキシコにおいては男らしさというものが「国家創成期を起点に、国家建設に際して中心的な役割を果たしてきた」³³とし、マチョとマチスモが、国家形成時に不可欠なものであったと結論づけた。

実のところアーウィン同様、小説作品におけるマチスモのあり方を分析した論考はいくつか散見される。メキシコ革命の残虐さを描いた傑作とされている『虐げられた人々』(1915)の作者マリアノ・アスエラの複数の小説をまとめて分析した『マチスモとマリアノ・アスエラの三本の小説』³⁴(1976)にあっては、メキシコ革命時に出版された3本の小説作品のなかで、マチスモ言説がナショナリズムの興隆と連動していることが指摘される。そしてその際のマチスモの定義を、近代国民国家として立ち上がって行こうとしていた1950年代頃のメキシコ人論すなわち、サムエル・ラモスとオクタビオ・パスの二論考を根拠としていることは言うまでもない。この二人の論に基づきマチスモを取り出した例としては他にも、英国のD. H. ロレンス、スペイン人作家ラモン・センデールおよびメキシコの小説家カルロス・フエンテスの作品群につき考察したジャネット・バーバーの『ロレンス、センデールとフエンテスの小説におけるメキシコのマチスモ』³⁵などがある。小説作品を分析する際、ラモスやパスが定義したメキシコ人論とマチスモ言説をまとめて根拠とするものが多く、元の論考に深く検討を加えることなく引用するといったこのような状況は、近代国家建設期に提示された両者の考え方をそのまま温存しているに過ぎないと言えることができる。

上記のようなマチスモ言説に関するステレオタイプ化は、実のところ、アメリカ人とメキシコ人を「境界づける」³⁶ために必要とされたものにすぎな

いと、ディディエール・マチジョットは最近の論考『マチョとマチスタ』(2013)で鋭く切り込んだ。マチジョットは、メキシコ人について考えることはナショナリズムと切り離しがたいものであるということをおっさり認めている。つまり、「愛国心と革命と民衆が、マチョたるものを大衆的な愛国者、革命者とみなし、鼻厘のヒーローとして仕立てあげた」³⁷とする。もともと動植物のみに使用されてきたマチョというタームは、「1940年代までは高貴で勇気があるということと同じ意味であった」³⁸が、1970年代以降は、単なる性的機械として否定的イメージへと押しやられたと分析した。マチジョットの「1940年代まで」という指摘は、大土地所有制度が本格解体され、広義の意味におけるメキシコ革命が終了したとされる時期と一致する。言い換えると、メキシコ革命を経て、国民意識の高揚のために広く支持された「高貴で勇気がある」男性像は、この時代をもって終了したとも言えるのである。マチジョットは同書においてマチスモを論じるなかで、メキシコのフェミニズムの立役者の中心的人物として、作家ロサリオ・カステリャノスにも言及する。カステリャノスには「マチスモというタームより家父長という形容詞を好んで使用する」³⁹傾向があると述べているが、その根拠とする彼女の評論集『ラテン語を知る女』(1973)への具体的な参照ページについては、同書に記載がないのは残念である。

続いて、これまで論じてきたマチスモ言説を具現する人物像を、実際のカステリャノス作品のなかに探っていくことにする。

4. 典型的マチョとしての農園主

ロサリオ・カステリャノスは、女性解放を訴えたフェミニストと見なされているため、彼女の作品にみられるマチスモ性についても多くの論考がある。作品分析に入る前に、それらを概観しておく。ロサリオ・メルカードは『ロサリオ・カステリャノスの作品の不均質性』⁴⁰において、『バルン・カナン』と第二の長編小説『真夜中の祈り』(1963)を取り上げ、各々における男性登場人物に言及した。農園主セサルは「権力のシンボル」⁴¹として据え

られていること、また、家父長制社会における男の役割とは、権力、公、支配欲といったことがらと関連づけられるが、女の役割は、母性、生殖目的、家庭内において抑圧され服従を強いられる存在に収斂された⁴²と説く。メルカードはこの論考にあたり、エヴリン・P・スティーヴンズのマチスモに関する定義に依拠し、マチスモとは「男らしき礼賛」⁴³であるとしたスティーヴンズの定義付けに対し、なんら検証を加えることなくそのまま引用する。スティーヴンズの定義は元をたどれば実のところ、ラモスならびにパスのマチスモ論すなわちマチョのステレオタイプと言われるものをそのまま転用しているだけである。

そのほか、マリア・アメリカ・ルナ・マルティネスの『ロサリオ・カステリャノスの小説における男性人物像と男性性』⁴⁴（2011）においても、マチスモの定義につき、ラモスとパスの論がなぞられる。マルティネスは、カステリャノス作品のなかの男性登場人物の造形につき詳細に考察を加えているもののマチスモとは、メキシコ人としての自覚を持たせようとした際、識字率の低い国民に対し国家の歴史を知らしめる手段でもあった壁画運動を背景にした「国家アイデンティティの特徴」⁴⁵の一つにすぎないと一蹴した。『バルン・カナン』の農園主セサルのほか、セサルの弟の私生児エルネストや、先住民の指導者フェリペにも言及するが、各々、夫／父／支配者／叔父といった男性役割を担うなかで、女性を中心とした他の登場人物たちからどのような役どころを期待されているかについての考察はなく、男性人物像を分析する際、男とは「こうである／こうあるべきだ」⁴⁶といったように、物語中で第三者の語り手が定義する部分を拾うのみにとどまっている。

そもそもカステリャノス作品においては、主人公は女性である場合が多く、分析される対象も主に女性登場人物という傾向が見受けられる。ところが、女性登場人物は全て男性登場人物との関係性で語られる⁴⁷という指摘もあるように、作品中、男性人物が登場しないかというところではない。とはいえ、彼らのうちの何人かには旅に出たり殺されたりといったエピソードが配され、途中で物語舞台から姿を消すか、もしくは最初から名付けられず単に「男」とだけ描写されることが多いといったことも特徴的であると言え

る。

男性人物に焦点化した論考が少ないなか、メキシコ人男性は典型的マチョではなくむしろ、家事育児に多大な貢献をなしていると指摘した前述のアーウィン、1950年代に出版された代表的な小説群から、マチョな男性像の典型であるとして『バルン・カナン』の農園主セサルを取り出した。ここでは、先住民の使用人たちは、セサル自身が考えているほどには農園主としての権力を保持しているとは考えておらず、農園主一族の崩壊はセサルが原因となって始まるのではなくむしろ、跡取りの一人息子が突然亡くなってしまったことに起因するとした。つまりアーウィンは、セサルはマチョの典型などではないと断言する。家事育児にとうてい貢献しているとは言えない農園主セサルではあるが、作者カステリャノスの意図としては、「人種というもので分け隔てられたメキシコという国の、未解決の裂け目、ジェンダー間の軋轢、ナショナルアイデンティティの矛盾した残骸」⁴⁸であるとして、作家がメキシコ特有の未整備な社会体制を暗に非難したとアーウィンは分析したのである。この指摘は、建国期メキシコの混沌とした状態をそのままに言い表しているとも言えるだろうか。

農園主がマチョでないとすると、それでは「マチョ」はどこへ行ったのだろうか。それは、セサルのいとこの三人姉妹の長姉フランシスカの振る舞いに見ることができる。最後まで農園は手放さない、ときっぱり公言したとおり、先住民の使用人たちの信用を失うことなく亡き父から引き継いだ農園を死守する覚悟であるフランシスカは、農園から戻る旅の途中、家族のための宿を頼むいとこセサルの一家を玄関先で追い返す。使用人たちに農園を焼き払われた不甲斐なさを責めたてて、フランシスカは次のように正面切ってセサルを罵る。

「私はここに残り、あなたたちは去って、逃げていく人たちのよ。(中略) 私は自分の権利は決して譲らないわ。たとえ死んでも自分のものは手放さないわ。そして死んだとき、みんなが来て私の手をこじ開けようとしても、一握りの土だってはなしはしないわ」⁴⁹

激しく挑むかのように、いとこを追い詰めて冷たく言い放つフランシスカに対しセサルは、言い返す言葉が見つからない。フランシスカは、先住民の使用人たちをなかば脅す格好で呪術を操れることを誇示するなど、農園主としての座を死守すべくなりふりかまわない様子であった。女性特有の狡猾で不当な手段であるとしてセサルは、そうしたフランシスカのやり方を認めることができない。それゆえ、あざ笑うようなそぶり「魔法の薬」(240)を調合する場所を尋ねることで彼女を茶化し、捨て台詞を残すことしかできないのである。とはいえアーウィン、このフランシスカをそのままマチョと称したわけではなく、セサルよりもより「男らしい (manly)」⁵⁰と評価しただけにとどまり、macho というタームの直接使用は避けている。日本語にしてしまうと、manly も macho も共に「男らしい」と訳語があてはめられよう。アーウィンは、スペイン語の macho に英語の訳は与えていない。このことから、英語圏の米国内であっても macho のまま通用するということを示唆される。言い換えると、アーウィンが macho というタームを使用する際には、macho というタームはそもそも〈メキシコ人〉の〈男性〉のみが対象であるとした考え方がその根底にあると言えるのではないだろうか。

5. 女の視線が補完すること

メキシコをはじめとしたラテンアメリカにおいてマチスモを取り上げる際、コインの裏表のように語られるものがマリアニスモであることについては第2節で述べた。それではカステリャノスは、こういった見方についてどのように考えただろうか。カステリャノスは、作家活動の早い時期から新聞に評論を投稿することを通じ、メキシコ女性の解放に向けた啓蒙活動をしている。それらの論考を集めた評論集『ラテン語を知る女』は、没する前年の1973年に出版された。同書においてメキシコの女性の役割について考察するなかでカステリャノスは、男の〈共犯者〉としての女の役割を指摘する。「マチョな男と自己犠牲的な女」⁵¹と称し、マリアニスモによって喧伝された〈奉仕する〉女がマチョな男と共謀し、男を男であらしめる状況を下支えす

るものとしての役割を、取り出したのである。つまり女は、グアダルーベの聖母のように慈悲深くかつ自己犠牲を厭わない存在であり、その女が、男にマチャオであることを期待することで男がマチャオとして仕立て上がるという構造を可視化したのである。ジェンダー規範によって分断された男／女が、共犯者としてつながる奇妙とも言える現象こそが、マチスモ言説を構成する主たる要素であると言えよう。言い換えると、マリアニスモという女性のあり方に裏打ちされたマチャオのありようがマチスモ言説なのであり、その二つの概念が車の両輪のように、男／女双方の行動を縛る規範ともなっているのである。第三者の語り手によって物語が進行する『バルン・カナン』の第二部では、着目すべきは、妻の夫に対する視線である。

先に、農園主について全能の語り手がいかに評しているか、描写を確認する。政府の方針で農園内に使用人向けの学校を作ることになったとき、かつて館に足を踏み入れたことがなかったセサルの弟の私生児エルネストが、にわか教師に抜擢された。馬に乗って農園内を得意気に案内する農園主セサル・アルグエリョの後について行きつつエルネストは、自分を認知することのなかった父を恨むこともなく素直に「アルグエリョの血を誇りに思っていた」(91)。一家は何代も続く農園主の血筋であり「農園主は自分の種をどこにでも好きなところに植え付ける権利を持っていた」(91)とあるとおり、一族の男たちは、使用人の先住民女性を「自分の好きにしてい」(91)のであった。農園という家父長制社会の頂点に立って指揮をとる男性は、性的に旺盛でありかつ多く子を成す繁殖力の強さを示すことで自らの男性性とそれに伴う権力を誇示し、家長の座に君臨できるのであった。「そこにいるインディオの女たちは、おまえの好きにしていんだぞ、エルネスト」(91)と気軽に告げるセサルに対しエルネストは、「自分自身に傲慢なほど自信を持ち、目の前で馬にまたがっているこの男に対する称賛の念」(88)を禁じえなかった。農園主が「好きに」した後の女たちは、農園主が認めたという付加価値が付き、誰からも欲しがられたからである。エルネストは、夫があちこちに「種」を植えつけることについて、妻が知り得ているかどうか率直に問うてみたところ、セサルは当たり前だと一蹴する。農園主の妻たるもの

は、法的に妻であるということのみが重要であり、夫が外で子供を何人産ませたとしても「腹を立てる理由はなかった」(91)。つまり、男が性的に放埒であった場合、女はむしろそのことに価値を見出すべきであったとした男性側からの一方的な見方が存在していたと言える。

妻である女が、そんな農園主の夫に期待したものは、実は経済力である。勝手に礼拝堂⁵²に集まることは禁止されていたのにも関わらず先住民の使用人たちはある日、土着信仰の儀式に興じていた。その様子を近く感じたため、農園社会の外から嫁いできた妻は落ち着きを隠せずにいた。不穏な様子は了知しており、農園のことなら家畜の肥り具合までよく知っていると言っていると落ち着き払って夫が言うものの、不安な妻は、先住民の扇動者がいるためであると主張する。夫が曖昧な様子で「取るに足りないといった態度」(144)を取ったことに妻は耐えきれず、詳細な説明を要求した。それゆえ夫は「物わがりのよくない子供に説明するように」(144)、警察に訴えたとしても無駄であると言いつつ含めようとするが、侮辱されたと感じて憤慨した妻は、以下のように反論する。

「これが初めてね。昔は自分の仕事はあなた一人で解決していたわ」
セサルは我慢できなくなり、新聞を床に打ちつけた。(144)

つまり、農園主として、一人では何も解決できなくなってしまった夫を暗に非難するのである。つい最近までは農園が栄え、アルグエリョ家が裕福な特権階級に属していたことは、結婚衣装に当時流行の高価なガラス玉を刺繍にあしらった「グアテマラに仕立て」(102)に出すほどであったというソライダの独白からもわかる。しかしながら時代は変わり、大土地所有制度の本格解体が始まると、農園主たちにとっては「不幸な時代が訪れ」(87)なのである。当時の良家の息子が皆そうであったようにセサルがヨーロッパに遊学していたとき、農園は破産寸前の危機に直面した。「革命の騒ぎ」(87)をいいことに、農園管理を任された管理人が経理をごまかしていたからである。ただちに帰国し、管理人を牢屋にぶちこんで農園の立て直しを図ったのが長

男のセサルであった。当時は、まだ立て直しが可能であった。

しかしながら、広義の意味でのメキシコ革命が終結したとされたこの時期、大土地所有制度の解体の波は、確実に地方都市にも及びつつあった。にもかかわらず、社会「状況がかわったことに気付かない」(144) 様子の夫を、妻は咎めたのであった。昔と違ってきていることは、農業査察官となった名付け子が突然農園を訪問し、「もうあなたの時代じゃありません、セサルさん」と面と向かって「斧を振りおろすように正確」(151) に名付け親であるセサルにきっぱり短く告げたことから明らかである。しかしながら、収穫物に放火され一文無し同然になってのちもセサルは、自分の名付け親でもある隣市の市長という強い後ろ盾があり、「ひと声かければ、市長は救援に必要な人をすぐに送ってくれるだろう」(223) と思い込んでさえいるのである。

ソライダは、一人暮らしの長かった年の離れた男と結婚するにあたり、その男セサルに愛人がいなかった点に不安があった。とはいえセサルは、その場限りの女にはこと欠くことはなかった。「そうでなければ男でない」(102) とソライダは語っている。この独白の描写からは、そもそも男たるものは、遊ぶ相手の女に事欠いてはいけなし、女を囲う程度の経済力を保持していることなどあたりまえであるという女の側の見方が明らかになる。ところが今では、自由に使えるお金がなくなったため、ソライダが何か物を買う時にさえ夫の許可がいちいち必要であった。女遊びどころか、妻の細かい買物にまで口をだすといった夫の状況に妻は憤慨し、不甲斐なく思っているのである。行商人に対し、いったん購入したシーツを返却するために故意に難癖をつけ、「恥ずかしい思いをさせられた」(102) と嘆くとおり、経済力こそが男の存在価値であると期待する一方的な視線が妻の側にはあると言える。男性側が、種を「植え付ける」繁殖力をもって男性性を誇示しようとするのに対し、女の視線の先はそこにはない。経済力が伴ってこそ「良家」としての面目を保っていることができたのであったと言える。

妻の期待に対し夫は、農園主として「当主である限り、まず何よりも私の決定が第一だ」(201) とだけ考える。一族のトップに君臨し、見渡す限りの

山の向こうに広がる大農園という一大コミュニティのなかで、大勢の使用人を無駄なく働かせ最大限の収穫をあげる必要があるからであった。男性嫡子を頂点に位置づけマチョすなわち「高貴で勇気」があると奉ることで、円滑に農園社会が機能するシステムが400年以上もの間、受け継がれてきたのである。しかしながら革命終結後、近代国家が建設されようとした時期、従来どおりのやり方で農園を切り盛りし経済力を保つことは不可能となった。農園社会のトップとして一身に期待を集めてきた「高貴で勇気」のある農園主は、もはや不要な存在となったのであると言えよう。時代の流れを敏感に察知し、早々に農園を売り払った友人ハイメは、知事への陳情の機会を待ち続けてコミタンに戻ろうとしないセサルについて、「誤りに気付くのを恐れて」(258) いるとソライダに語った。農園主一家の住まいのあるコミタンを指してソライダは、「かつて名士であった土地」(201) と称している。「名士」にあたるスペイン語の原語は、principalであり、この単語は「主要な」という意味の他、「傑出した、気高い」と訳されることも多い。「かつて」という一語が、傑出した良家であったセサル一家が没落したということを端的に表していると言えよう。いまや農園主は、「誤り」に気付くことを恐れるようになってしまった。マチョというタームに高貴で勇気があるという意味合いが付けられたのは1940年代までであったとマチジョットが指摘したとおり、大地所有制度の崩壊とともに、マチョつまり「鼯鼠のヒーロー」としての農園主は必要とされなくなってしまったと言えるのである。

6. 尊敬される父親

それでは、語り手である7歳の娘から見ると、マチョな農園主はどのように見えていたのだろうか。父の腰の位置あたりが目線の高さである女兒からすると父は「絶えず成長する大きな樹」(6) である。「大きな」という形容詞には、父という存在に対する娘の尊敬の念が表れており、かつまた「絶えず成長」と表現していることで、父の今後のさらなる活躍の可能性を期待していることが示唆される。農園主である父はたいてい「廊下のハンモックに横

になったままインディオを迎え」(13)で指図する。そんな様子を日常的に観察する女兒には、農園主とは「命令する人」(14)でなおかつ力がある人であることが認識できている。それは、「お父さんと乳母しかわからない言葉」(33)⁵³、つまり先住民が日常的に使うツェルタル語を話しているからでもある。

ところが、農園を手放すよう諫める友人のハイメに対しセサルは、最初は聞く耳をもたない。しかしながら、いままでどおりのやり方での農園経営は不可能であると強く諭されると、「お父さんはうなだれ、ほこりで汚れた長靴の先をじっと見つめ」ていた。女兒は、悩みを隠しきれない父の様子をつぶさに観察する。大人同士の会話を、耳をそばだてて聞き、父の態度が変化していくさまを逐一眺めている。とうとうあきらめたように、小さな声でセサルがゆっくりと放った文言は、以下である。

「しかし私はもはや一から始め、学ぶような年ではない。私は農園の経営者でしかない。チャクタハルは私のものだ。誰も私から奪うことはできない。たとえ共和国の大統領であっても。私はどんな状況になろうとも、そこに残るつもりだ。私は他のどんな土地にも暮らしたくない。遠くで死にたくないんだ」(244)

このように自信を喪失した様子で言葉をつぐ父について女兒は、「重々しい話しぶりから、お父さんの気持ちは変わらないこと」(244)を知る。時代は変わっていくが、父の方針は変わらないことが印象づけられる個所であり、農園主のみが一人、時代に取り残される様子が強調される。母ソライダは部屋付きの乳母と二人で、州都に陳情に行くことに決めた父の支度を始める。たんすの引き出しは開け放たれ、農園からの長旅から戻ったばかりのスーツケースは中身が詰まったままで、ベッドもぐしゃぐしゃであるといったように、部屋が散らかった状態の描写からは、収穫物を焼かれた直後の農園一家の混乱した様子とともに、混沌とした農園主の心情がそのままに語られているかのようである。

そのような状況下、女性であるがゆえに跡取りとなり得ない女兒は、慌てる大人たちを無視し、旅先のおみやげの小石を乳母に手渡す。大人たちの混乱ぶりを意に介さない女兒は、父が「うなだれ」ているさまに直面しても特に気に病む様子はない。弟が農園を引き継ぐことが決まっているため、女兒自身は農園の行く末について関心を寄せることはないのである。女兒にとって父は「絶えず成長する樹」という存在であり、農園を手放してのちも変わらず尊敬の対象から外れることはないという確信が厳として保たれていると言える。

物語の最終段階で女兒は、跡取りであった弟亡きあと、日本のお盆に似た行事である11月の「死者の日」に、当家の墓参りに出掛ける。祭りの日、家族連れは皆一様に「背広を着て、金の鎖をつけた一家の主」(321)が先頭を歩く。だれもが長い挨拶を交わして道を譲りあっているのと対照的に、女兒の父の姿はない。知事に陳情するため出掛けた先の州都から、息子のことを心配しすぎであると妻宛ての手紙を書いてのち農園主は、物語のなかで二度と言及されることがないのである。「高貴で勇氣」に満ち溢れていた農園主は、必要とされなくなり、それゆえ物語舞台からも姿を消してしまうのである。

7. おわりに

本稿では、マチョというタームやマチスモ言説がメキシコをはじめとするラテンアメリカの国々でどのように定義されてきたかを概観した。その上で、カステリャノスの小説『バルン・カナン』を取り上げ、典型的マチョと見なされきた農園主の振る舞い方を考察した。その結果、妻や娘のまなざしに着目すると、マチョであってほしいと願うのはほかでもない女たち自身であるということが判明した。マチスモ言説とは、男女のジェンダー規範に裏打ちされたものであったのであり、男性のありようについてマチョであるべきであるといった固定観念を押し付けるのは、実は女性の側がまなざす視線に下支えされていたということが明らかになった。マリアニスモとマチスモ

といった、お互いに補完的役割を持つ概念が支配するラテンアメリカ、メキシコ社会にあっては、男女が共謀することでジェンダー規範が保たれた。男らしいマチョたる存在とは、女がつくりあげたものでもありえたのである。しかしながら、大土地所有制度が崩壊した後は、農園社会という家父長制社会を維持する必要もなくなったため、「高貴で勇気」のある農園主という存在は不要となったということである。

大土地所有制度が解体された1940年代は、その後20年間以上にわたって継続することとなるブラセロ計画⁵⁴により、米国に働き手として移住するメキシコ人が急増した時期と重なる。マチジョットは、1970年以降、マチョという単語に否定的イメージが付されたことを指摘した。同計画の終了後も増え続ける低所得層労働者階級のメキシコ人移民たちが、米国内で「境界づけ」られようとしていたことと関係がないとは言えないのではないだろうか。米国内において、チカーノと称されるメキシコ人たちがアングロ系の米国人に差別化されていく過程にあって、マチョというタームの使用法や、マチスモ言説がどのように作用したかという点を掘り下げて分析することについては、今後の検討課題としたい。

注

- 1 井川ちとせ「第一章 ジェンダー・アイデンティティという虚構」中野知律・越智博美編『ジェンダーから世界を読む』明石書店、2008年、11ページ。
- 2 スペインのロマンセロ（史詩）に起源を持つ物語詩のこと。ポルフィリオ・ディアス政権の専制政治下や、メキシコ革命時といった社会の混乱時に流行した。行進中や集会の場などで歌われ、参加者の士気を高めたとされる（黒田悦子『メキシコ系アメリカ人』国立民族学博物館叢書、2000年、71ページ）。
- 3 林和宏「ゆらぐマチスモ―「転換期」メキシコにおける男性アイデンティティ―」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第11号、つくばラテンアメリカ・カリブ研究会編集部、2004年、6ページ。
- 4 Fox-Lockert, Lucia. *Women Novelists in Spanish and Spanish America*. N. J., and London: The Scarecrow Press, Inc., 1979, p. 282.
- 5 チアパスの先住民の言葉で、「九人の神々の住むところ」の意味。
- 6 チャールズ・ワーグレイ『ラテンアメリカの伝統』佐野泰彦訳、新世界社、1971年、72ページ。

- 7 ワーグレイ前掲書、73ページ。
- 8 ロサリオ・カステリャノス『バルン・カナン—九人の神々の住む処—』田中敬一訳、行路社、2002年、34ページ。
- 9 マチスモ、マリアニスモについては、国本伊代「序 ラテンアメリカ社会と女性」『ラテンアメリカ社会と女性—』国本伊代・乗浩子編、新評論、1985年、および乗浩子「女性の地位と役割」『ラテンアメリカハンドブック』松本重治監修・加茂雄三編、講談社、1985年のほか、De Mente, Boye Lafayette. *NTC's dictionary of Mexican cultural code words*. Chicago: NTC, 1996をもとに記述した。(洲崎圭子「『第三世界』発のフェミニズム—『バルン・カナン』を巡って—」『F-GENS ジャーナル』No. 10、お茶の水女子大学21世紀COEプログラム ジェンダー研究のフロンティア、2008年を参照)。
- 10 ジャーナリストのパトリック・オスターによれば、グアダルルーペの聖母こそ、メキシコ社会において男性が作りあげてきた女性イメージであるとする(『メキシコ人』野田隆他訳、晶文社、1992年、386ページ)。
- 11 林前掲論文、6ページ。
- 12 Anzaldúa, Gloria. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco: Aunt Lute Books, 1987, p. 83.
- 13 国本前掲書、16ページ。
- 14 De Hernandez, Jennifer Browdy. "Introduction." *Women Writing Resistance: Essays on Latin America and the Caribbean*. Ed. by Jennifer Browdy De Hernandez. MA: South End Press, 2003, p. 2.
- 15 林前掲論文、1ページ。
- 16 林前掲論文、10ページ。
- 17 たとえば社会学の分野においてカルメン・ルゴは、マチスモは暴力行為と関連付けられることが多い点に着目し、暴力とマチスモとの深い連関性を指摘した。その「マチスモと暴力」においてルゴは、マチスモの定義としてまず最初に、ルイスとパスの分析を根拠として採用している (Lugo, Carmen, *Machismo y violencia, Nueva Sociedad* Nro. 78, 1985, pp. 40-47. nuso.org/media/articles/downloads/1288_1.pdf, 2015年11月25日 updated.)
- 18 オクタビオ・パス『孤独の迷宮』高山智博・熊谷明子訳、法政大学出版社、1982年、23ページ。パスは同書において、「メキシコ人は男性の欲望のためであれ、あるいは法律、社会、道徳が定める目的のためであれ、女性を、道具として考えている」(同、28ページ)と断言し、それゆえ女性は「男性社会が強要するイメージの中に閉じ込められて暮らしている」(同、211ページ)と指摘した。
- 19 サムエル・ラモス『メキシコ人とは何か—メキシコ人の情熱の解明—』山田睦男訳、新世界社、1980年、65ページ。
- 20 原文では、ふりがなが付されている。
- 21 ラモス前掲書、65ページ。
- 22 林前掲論文、4ページ。
- 23 原文では、ふりがなが付されている。
- 24 林前掲論文、2ページ。

- 25 Gutmann, Mathew C. *The Meanings of Macho*. University of California Press, 1996, p. 2.
- 26 Gutmann, *ibid.*, p. 2.
- 27 Gutmann, *ibid.*, p. 221.
- 28 原文は, “No, *somos hombres* [we’re men].” である (Gutmann, *ibid.*, p. 221.)。
- 29 林前掲論文、8 ページ。
- 30 Irwin, Robert McKee. *Mexican Masculinities*. University of Minnesota Press, 2003, p. xix.
- 31 Fernandez De Lizardi, José Joaquín. *El Periquillo Sarmiento*. 1816, =EMU, 2013.
- 32 男らしさに特化して小説作品の登場人物像を集中的に考察したと同時に、メキシコにおける男性同士の結びつきをも可視化した功績は大きい。
- 33 Irwin, Robert McKee, *op. cit.*, p. xvii.
- 34 Santamaría, Enrique M. *El machismo en México y tres novelas de Mariano Azuela*. Dissertation, University of New Mexico, 1976.
- 35 Barber, Janet. *Mexican machismo in novels by Lawrence, Sender, and Fuentes*. University of Southern California, 1972.
- 36 Machillot, Didier. *Machos y Machistas: Historia de los estereotipos mexicanos*. Ariel, 2013, p. 11. サミュエル・ハンチントンが『分断されるアメリカ』(鈴木主税訳、集英社、2004年)において、「ヒスパニックとアングロのあいだの文化の境界線が、アメリカ社会で最も深刻な溝として、黒人と白人のあいだの人種の境界線に取って代わるだろう」(449ページ)として、両者の間の「境界線」の存在を示唆していることは興味深い。
- 37 Machillot, *ibid.*, p. 79.
- 38 Machillot, *ibid.*, p. 12.
- 39 Machillot, *ibid.*, p. 160.
- 40 Mercado, Rosaio. *La heterogeneidad en las obras de Rosario Castellanos*. UMI, 1996. 9634132. 1994年のチアパスにおけるサパティスタの蜂起を予想させる作品であり、先住民を支援する新たな言説が含まれていると高く評価している。
- 41 Mercado, *ibid.*, p. 162.
- 42 Mercado, *ibid.*, p. 175.
- 43 Stevens, Evelyn P. “El marianismo: la otra cara del machismo en América Latina”. *Diálogos: Artes, Letras, Ciencias humanas*, Vol. 10, No. 1 (55), El Colegio de México, enero-febrero, 1974, pp. 17–24.
- 44 Luna Martínez, María América. *Personajes masculinos y masculinidades en la narrativa de Rosario Castellanos*. Universidad Iberoamericana, 2011.
- 45 Luna Martínez, *ibid.*, p. 62.
- 46 Luna Martínez, *ibid.*, p. 75.
- 47 Carpenter, Victoria. “Erasing Men from *Álbum de familia* by Rosario Castellanos”, *E.I.A.L.*, Vol. 21, No. 2, 2010, p. 61.
- 48 Irwin, *op. cit.*, p. 215.
- 49 カステリャノス前掲書、239ページ。以下、同書からの引用はかっこ内に数字を記す。
- 50 Irwin, *op. cit.*, p. 213.

- 51 Castellanos, Rosario. *Mujer que sabe latín*. México: Secretaría de Educación Pública, 1973, p. 31.
- 52 大農園は一つの村落共同体であったため、中には使用人たちの住居のほか礼拝堂なども設置されていた。
- 53 スペイン語は、農園主をはじめとする上層階級のものたちだけに使用を許された言葉であった。
- 54 1942年から22年間にわたって、米墨二国間政府の取り決めでなされたメキシコ人労働者の出稼ぎ移住計画のこと。延べ500万人の正規移住者のほか、同数の不法移民が渡ったとされる（庄司啓一「ブラセロ計画についての一考察」城西経済学会誌、19号[1]、1983年）。